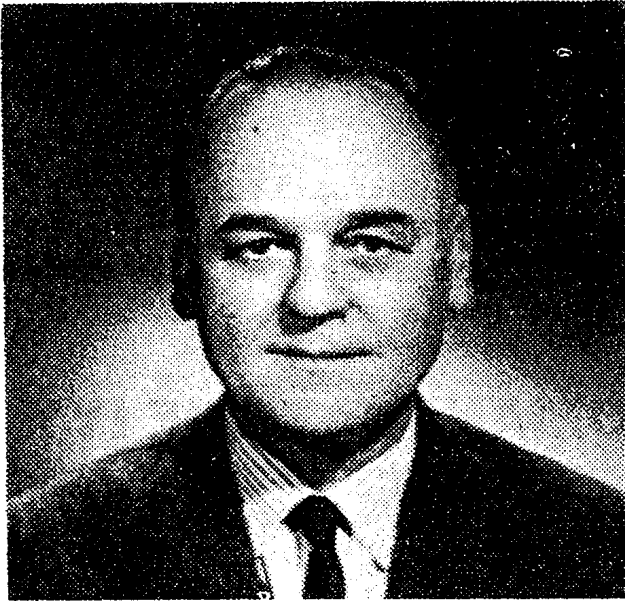


甦った修辞学

ヴァジレ・フロレスク
谷口 勇・訳



ヴァジレ・フロレスク教授
(1915～1982)

Din Japonia, profesorul Isamu Taniguchi — care locuiește la Osaka — ne scrie: „Vă mulțumesc mult pentru «Tribuna României». Citesc cu mare interes toate numerele. Vreau să vă propun o temă și v-aș rămâne foarte îndatorat dacă ați ține cont de sugestia mea. Sinteți de acord să scrieți un articol despre profesorul Vasile Florescu, care a murit în 1983? A fost un specialist de renume mondial în domeniul stilisticii și s-a bucurat de prețuirea multor oameni de știință din străinătate”. L-am rugat pe specialistul în retorică Mircea Frînculescu, redactor al revistei „Limba și Literatura Română”, să dea curs dorinței domnului Isamu Taniguchi.

左掲のように、生前に文通して
いて、心臓病で急逝されたルーマ
ニア・アカデミー会員ヴァジレ・
フロレスク教授を偲んで、“Tri-
buna României” 紙に追悼記
事を依頼したところ、“Limba și
Literatura Română” 誌主幹
で修辞学の専門家 Mircea
Frînculescu 氏の一文が、上掲
紙の1985年2月1日号に発表され
た。本稿を理解する上で一つの貴
重な資料なので、まず同氏の寄稿
を試訳しておく。

「最近の著名ルーマニア人——
その考え方が国際学界の価値階梯
に滲透したほどの人物——のうち
で、ヴァジレ・フロレスクはその
つつましい職業的地位からすれば
あまり尋常ではない状況にいる。
1915年、マンガ村（ドンボヴィ
ツァ地方）に農民の両親から生ま
れ、ブカレスト大学文哲学部を卒
業したが、彼の生活は“一介の高
等中学校教師”——これはもちろ
ん、彼が誇張して好んで言

っていたことなのだが——の状態の縁から出ることはなかったからだ。だが、実際上大して重要性のないこうした外面的データをもってしても、頼もしい教養（ギリシャ・ラテンのテキストや、ヨーロッパ諸国、合衆国、等の専門文献を原語で読んで獲得されたものである）、深い総合力、判断形成の透明なやり方、ならびに、見境いもなく受け取られた仮説、意見、理論を批判的に検討したり、あるいはそれらと争ったりする当然な頑固さが隠れるわけではない。一言でいえば、学者として、ヴァジレ・フロレスクはこの高級な仕事に必要な準備も、思想家に期待される精神的な高さも、偽りの独創性を求めずに、強固な論証に基づく場合には持続を要求される、思考の大胆さも、古かろうが新しかろうが、当分野の権威に怯えさせられることのない力も、すべて持ち合わせていた。

こうしたすべての優れた性質は、次の事実から説明できる。すなわち、まず最初にルーマニア語で出版された、この“平凡な”教師の仕事のうちの断片『修辞学とその現代哲学における復権』（*Retorica și reabilitarea ei în filozofia contemporană*, “Studii de istorie a filozofiei universale”, I, București, Editura Academiei, 1969）が、ちゅうちょなく——しかも賛辞すらをもこめて——西洋の権威ある雑誌 *Philosophy and Rhetoric* (1970), ** *Il Verri, Rivista di letteratura* (1971) において発表されたり、紹介されたりしたのである。（全文は *La retorica nel suo sviluppo storico*, Bologna, Il Mulino, 1971 の表題にの下に Alessandro Serra によってイタリ語に翻訳された）。記録的な成功や、とりわけ、研究範囲を拡大する必要性は、この主題をはるかに広範な規模で再開するように駆り立てたのであり、それは1973年に新著『修辞学と新修辞学。生成、進展、展望』（*Retorica și neoretorica. Geneză; evoluție; perspective*, București, Editura Academiei, 266p.）の出現によって具体化した。この本は間もなく、参考図書と見なされるどころとなり、したがって、ルーマニアおよび外国の文献表の中に挙げられるようになった（たとえば、なかんずく、*Rhétorique de la poésie*, Bruxelles, Édition Complexe, 1977 を参照）。

著者の名声が、修辞学の再評価——この再評価は流行または感傷的な理由から着手されたのではなく、説得術はヒューマニズム（この脈絡の中に位置づけられたことから生ずるあらゆる結果をも含めて）の時期に特徴的なものだと前提から出発しているのだが——にお蔭をこうむっていることは疑いない。同じく、この現象の規模を評価する際の幅広い一つの観点は、次の事実、つまり「もともと、修辞学は優れて哲学的な学問、価値の論理学——言述の組成的構造、文体、言語を、これらが論証やコミュニケーションに結びついていた限りにおいて、扱うもの——だった」*** という事実

の証明に基づいていた。ここに転写したのは、この研究書の結論の一つに過ぎないが、重要なものである。それというのも、それは修辞学が総合的な学問であるにも拘らず、今日でも、独自の接近手段と対象を有する、完全に自律的なものと見なされねばならないとの確信を正当化し強化しているからである。

多くの点で際立っている本書が、伝統的な観点とか当時の新理論とかをわざわざ追い求めずとも、世界でかくも大きな反響を享受しているのは、ないがしろにできぬことだ。残念ながら、ヴァジレ・フロレスクは、晩年に克服し難い病気によって絶えず生命を危険にさらされた人にしては過度な努力を払ったが、その報いを見ることはできなかった。折りしも死去の年には、名著しか発行しない出版社“Les Belles Lettres”によって引き受けられて、フランス語版 *La rhétorique et la néorhétorique, Genèse-Évolution-Perspectives*, édition entièrement revue (ブカレストの Editura Academiei と共同出版, 1982, 222p.) が日の目を見たし、もう一つの版はロンドンの Abacus 社で準備された(多分。結局、これは実現しなかった)。

二つの試論『詩学。生成と進展』(*Poetica, geneză și evoluție*)と『批評論。その哲学的・歴史的基礎』(*Criticologia, bazele ei filozofice și istorice*)が原稿のまま残された。これらは印刷するには不完全かも知れないし、最終的なものではないかも知れないが、公けにされる価値はあろう。書き記したすべてのことに対して、ごく小さな細部にまで徹底する著者の真剣さを知っているからだ。

同じように、もう一つの重要な貢献『古代文学の概念。生成と進展。美学および文学理論の歴史におけるその役割』(*Conceptul de literatură veche. Geneză și evoluție; rolul său în istoria esteticii și a teoriei literaturii*, București, Editura Științifică, 1968, 320p.)を国際回路に乗せることは、将来の義務に属する。本書も同じ作業計画、同じ構想をもっていたのだが、『修辞学と新修辞学』に提供されたような好機にはまだ恵まれていない。

以上のように、フロレスクは『修辞学と新修辞学』一冊のみによって国際的に有名になった稀有な学者なのである。なお、Romulus Balaban の *Români celebri* [著名なルーマニア人たち] (Cluj-Napoca, Editura Dacia, 1979, pp.138-168) には、「修辞学——道徳と理性との大いなる同盟者」(“retorica, un mare aliat al moraliei și al rațiunii”)と題して Vasile Florescu が紹介されている。

本稿は『修辞学と新修辞学』の第一章(“Rhetorica rediviva”, ルーマニア語原書, pp.11-20)を、フランス語増補版(Melania Munteanu 訳), pp.1-9を参照の上、訳出したものである。著者の生前から翻訳許可を得ていながら、訳稿の遅れか

ら著者の期待に添えなかったのは、返す返すも残念である。

- * これは訳者の誤解だったようだ。N. Tertulian 教授の便りから、1983年没と思ったのだが。
- ** 本号には、フランス語からのBarbara Johnstone による英訳“Rhetoric and Its Rehabilitation in Contemporary Philosophy”が掲載されている (pp.193-224)。“Editorial Note”が初めについている。
- *** *Retorica și neoretorica*, p.222 (*La rhétorique et la néorhétorique*, p.196)。なお、この仏訳は、元来、著者への小生の依頼によって著者の翻訳料金負担で始められた仕事であり、ほとんど自費出版に近い形で公刊されたものだった。

甦った修辞学

確立した秩序の転覆を避けるとか、進歩を刺激する目的で、文化遺産を再検討し再評価するのは、ずっと昔から行われている方法である。キリシャ文化における第二次詭弁法、ラテン文化における好古癖、中世の小“ルネサンス”，そして大ルネサンスは一般に知られている例であるが、この点ではやはり真に新しい方法はほとんどないことをこれらの例は証明している。

いかに簡略なものであろうと、いずれの研究も次の考察へ行く着く。つまり、今日、文化遺産の再評価に基づく二つの解決法が、ブルジョア文化のさしかかっている危機を終わらせるか、それとも、少なくとも、減らせることを目指す試みにおいて、優先権を競っているという考察へ行き着く。より最近の、ひとつの解決法は中世の遺産、より正確には、スコラ学やトマス説の再評価をわれわれに勧めるもので、同時に、ルネサンスやこの時期のヒューマニズムの否定的局面に注意を集中させるのである。それは大衆の意識の裡でいわゆる“迷信打破”を行なうという明白な目的をもっている。ルネサンスやこれに呼応するヒューマニズムに固有の貢献のなかで否定され得ないものが、軽視されるか、もしくは、多少とも巧妙に、中世のせいになされる。それというのも、ルネサンスは中世の延長に過ぎず、前者が後者から区別され

うるのはせいぜいその否定的局面によるだけだから、というのである。一般に、この運動は新精神主義（neospiritualism）の名で知られている。それは権威のある雑誌によって広まっており、また名声の高い信奉者たちを擁している。そのなかには、博識をもって評判の中世研究者だけでなく、出発点は異にするが、その著書の一般的結論ではこれらの研究者たちと一致する思想家も認められる。

中世の精神性を復権させ再評価しようとする激しい活動にも拘らず、古代の遺産の再評価を意図する、より古くからの運動がますます広がりを見せている。文献学的博識とか文化史や文化哲学に限られない、偉大な才能を持つ何人かの闘士たちの威信がそれに栄光を授けており、そして、“中世の精神性”への回帰が既定秩序にとってばかりか、人間や人類一般にとっても危険だと考えているすべての人びとから、積極的支援を得るのに寄与している。

しかしながら、古代文化の再評価のための運動は、当初からの特徴だった魅惑的な総論の領域をまだ脱したことがなかった。ヴィンケルマンやゲーテから、シュテンツェル、イエーガーやマルーに至るまで、この運動の支持者たちの努力は、結果として、古典古代についての絶えず修正されたイメージを提示しただけだった。この運動において明らかなことは、人類の一時的ではない、決定的な獲得物がギリシャ・ラテン世界に負うており、そして、それなしで済まそうとすれば、人類は疎外され、苦痛をひき起こさざるを得ないだろうという、一般的信念なのである。

だが、古代文化から何を受取るべきなのか、また、今日この宝庫をどう利用すべきなのか？　こういう質問には、新古典主義の理論家たちも、新ヒューマニズムの理論家たちも満足すべき回答を与えなかった。実際、ルネサンスの何人かのヒューマニストたちの夢に沿った完全復権は、今日もはや誰にも可能ではない。まれな場合に、計画を粗描しようとしたり、もしくは何か方法を提案することがあっても、対立は深まるばかりであり、そのため、議論は何らの実際的成果にも至っていない。ひとたび“過剰消費”の段階に入り込むや、資本主義世界は新古典主義ないし新ヒューマニズムを、社会科学

の発展に幾分かでも必要で、影響を及ぼしうる方位、と想像することはもはやできなくなっている。

しかしながら、上述の二運動とは独立した別の運動があり、この運動はこれらの方向の魅惑的だが効力のない総論の領域から脱しようと試みて、それに成功さえしたのである。それは新修辞学とでも名づけることのできる運動である。その主唱者たちはギリシャ・ラテン世界を理想化することをやめて、今日では忘却されているが、ギリシャ・ラテンの古代の著しい特徴だった修辞学を再評価するにとどめる。この運動の信奉者たちにとって、修辞学は古代に果たしていたような育成的理想も、また、古代末期、中世期、ルネサンス期に行なわれていたような、演説家や“散文作家”用の案内書も提供しはしない。かれらの見るところでは、修辞学は世人に信じられたよりもはるかに重要な、別の種類に属する獲得物の集成を提供する。したがって、経験主義哲学や啓蒙主義およびロマン主義哲学によって激しい攻撃にさらされたために、修辞学は軽蔑され忘れられたけれども、そういうことは何ら根拠がないことになる。これらの獲得物の一部は今日でもまだ有用であることが明らかになるし、他の部分は、哲学や多くの他の社会科学のために、再考され深く掘り下げられる値打ちがある。

最近に始まったとはいえ、新修辞学運動は著しい広がりを見せている。論理学や認識理論においてだけでなく、法哲学や、一般言語学、文体論や文学批評においても、その運動は現れている。しかもさらに、商業広告——マーケティング、ポスター技巧や一般に宣伝、等——、もしくは政治的・宗教的宣伝に関するような、経験的基準のコーパスは、旧修辞学におけるいくつかの獲得物を再評価し発展させたために、語のもっとも厳密な意味で、科学となりかけている。

修辞学なる用語の意味圏域におけるいかに簡略な研究でも、この運動の広さが深さにおいても追求されうるとの確認にわれわれを導く。周知のように、文学におけるロマン主義の主張のための戦いは“芸術の自由”をスローガンにした。これは、修辞学やその従者たる詩学によって法典化されたあらゆる

規則の廃止を前提とする。承認された唯一の拘束は文法のそれである。修辞学には戦争を、文法には平和をユゴーは宣言していた。そしてこれによって彼は、当時までフランス文学を威圧していた学問をけなす過程を開始したのである。修辞学は無用なだけでなく、有害でさえある学問となってしまう、ほとんどすべての国で教育から除去されようとしていた。前世紀の末ごろ、ルナンは修辞学を上手に言うと呼ばれる術であり、ギリシャ人たちの唯一の誤りだと呼んでいた。彼は1871年の〔パリ・コミューンの〕敗北を、とりわけ、フランスの学校で修辞学に認められていた優位によって説明するまでになっていた。¹⁾

ルナンの主張は、文学的諸学科——そのなかでは修辞学が特選的地位を占めていた——の優勢を特徴とする“形式主義的”見解（形式陶冶 *Formalbildung*）に対して、ブルジョア階級の上昇期に際立ち始めた“現実主義的”な教育観（実際陶冶 *Realbildung*）がおさめた成功の結果を反映している。こういう方位は、経験主義や功利主義によっても、あるいは、ダーウィン、スペンサーもしくはハックスリー（彼は“亡き”古典主義教育に対して一種の弔辞を述べた）のような、現代の科学万能主義の擁護者たちによっても助長されており、それがつくりだされる基になった観点が何であれ、この方位は芸術の否認とも一致する。この観点から見ると、修辞学の過少評価はもっと大きな意義を帯びる。その意義は、ロマン的文学流派と古典的文学流派との間で対立していた論争における挿話の局面を越えるものである。当然のことながら、軽蔑的意味がこの〔修辞学なる〕語の意味圏域の主調となる。1947年には、E・R・クルティウスのような文献学者・文化史家にとっては、“反故”や“恐ろしい幽霊”という評価がまだ実状に合致していた。1950年には、ルイ・ブレイエのような人にとっては、“危険な道具”なる評価が何らの誇張も含んではいなかった。²⁾

この学問に対する軽蔑がこれほど大きくなっていたので、この〔修辞学なる〕語の意味を完全に覆すことになった。ごく最近まで、“ロマン的修辞法”や“ロマン的修辞学”のことが、つまり、気取った、誇張的な文体や、“抒

情詩における高揚”——公然と反修辞学に立って文学理論を築いたこの流派に属するすべての作家に固有の特性——のことが話題になっていた。

しかしながら、二百年前まで支配的だった軽蔑的意味は、広汎な公衆の一部にとってのみ中心的であり続けているだけなのだ。第二次世界大戦の直前までは遠慮がちで、極めてまれだった、肯定的評価が、このごろでは突然増加を見だし、しかもその調子は控え目どころではない。われわれの自由にできる数多くの例のうちから、もっとも重要でもっとも知られているものとして、H・I・マルーとピエール・ギローの例を引用しよう。これらの例は広く流布している本の中に出ているものである。「われわれ現代人にとって、——とマルーは書いている——修辞学は策略、非誠実さ、退廃の同義語である。おそらくは、われわれがそれをもはや知らず、またわれわれが野蛮人になったという、ただそれだけの理由から。あの古典期に、他の芸術が持っていた別の慣例体系と修辞学をわれわれは較べる必要がある。たとえば、絵画における遠近法の法則、バッハないしラモーからワーグナーに至るわれわれの音楽におけるハーモニーの法則、さらには作詩法の法則を想起しよう。これらは形式主義、軽薄さではあるが、この文明に属するすべての人びとの間の共通項でもあるのだ」。³⁾

ピエール・ギローにとっては、「……修辞学は単なる規則集とは別のものであり、それはひとつの文化のあらわれである（……）。それはたしかに、古代のあらゆる学問のなかで、科学という名にもっとも値いするものなのだ。すなわち、観察の幅の広さ、分析の精緻さ、定義の正確さ、分類の厳密さをもって、ことばの表現力が体系的に研究されており、これに匹敵するものは、当時のほかの人知にはどこにも見当たらない」。⁴⁾

様々な研究領域で名を上げた重要人物によってなされた、数多くのこの種の主張から見ても、修辞学を再評価しようという願望を多数の思想家たちが抱くのは当然至極だったのであり、しかもそれは実際に生じた事実でもあるのだ。もちろん、何人かの思想家の願望が、われわれの目撃している修辞学の急変を引き起こしたのではない。修辞学の復権がその賛同者たちの何人か

にとってはひとつの流行に過ぎないことをわれわれは否定できないとはいえ、上のような急変をもたらした原因は数多く、かつ奥深い。だが当面考慮に入れるべきことは、この修辞学上の急変がおかげを受けているのは、古典文献学の専門家でもなければ、文体論手びきの著者でもないという事実である。もっとも、彼らはこの学問を決して無視したことの無い研究者の部類を成してはいるけれども。つまりは、新修辞学はフォルマン、ボールドウィン、ナヴァール、もしくはグリアスンのような人に何を負っているのであろうか？

修辞学の復権がとりわけ恩義を受けているのは哲学者たち、すなわち、2千年以上の間執念深く修辞学を攻撃したまさに敵対者たちからなのだ。1952年に、Ch・ペレルマンがラランドの有名な『哲学用語事典』(*Vocabulaire de la philosophie*)の中に修辞学なる用語が記載されていないことを嘆き、1956年には、パオロ・ロッシがグイド・デ・ルッジエーロに対して、その基本的労作のひとつにおいてルネサンス修辞学の問題を僅か8ページで片付けたことを非難したとしても、今日では事情が異なる。たくさんの思想家にとって、修辞学は、哲学を袋小路から脱出させるための手段、また、学際的關係を深めるのに極めて有利な基礎を供給するための方途となったのである。エミール・ブレイエによって書かれたこの最後の一節は、かれがCh・ペレルマンとL・オルブレヒツ＝トゥテカとの共著『修辞学と哲学』(*Rhétorique et Philosophie*)のために書くことを承諾したはしがき——文の真ん中は途切られているが——からとったものだ。たとえば、重要な『哲学百科事典』(*Enciclopedia filosofica*)、フェレター・モラのものとか、英語圏でよく参照されるダゴバート・D・ルーンズ“と72名の権威たち”のものといった、新しい哲学辞典はその最新版では修辞学を熱心に収録している。例外はラランドであって、彼はわれわれの知っている最新版たる1968年版においても、まだその用語を記載していない。もちろん、他にも例外はあるが、もっとも意外に思えるのは、ポール・エドワーズ監修によりマクミラン社から刊行された大『哲学百科辞典』(*Encyclopedia of Philosophy*, London/New York, 1967)である。この記念碑的工作は例外的な長所を有するが、それでもいく

つかの点では、はなはだ多くの書評家たちによって指摘されたように、「一年およびひとつの観念の遅れ」⁶⁾を示している。この編者たちは、議論の理論に当てられた、声価の高いたくさんの著述の出現や、また、ほとんどすべての西洋の大学における議論および修辞学の特別講座の開設が如実に示している深い新しさをつかみ損ねたのだ。わがルーマニアにおいても、1971年からは、論理学と修辞学の研究が法学部では必修になっている。

それだから、甦った修辞学は、現代文化の最重要な特徴のひとつなのだ。われわれは、この広大な復権活動——その規模はまだ頂点に達したわけではないが——において正当に思えるものと、そうでないものとを、時機が来れば指摘することになる。さし当たっては、修辞学なる用語が濫用されていること、過去数世紀に特有だった、明白な誤謬や混乱が、今でも存続しており、そして新修辞学が含んでいる肯定的要素の完全な主張を妨げていること、をわれわれは指摘しておく。今日、この学問が正確には何であるかを知っている人びとはあまり多くはないし、またとりわけ、文体論学者や西洋文学批評に特徴的な或る方向の信奉者たちは、驚くべき混乱した雰囲気維持の罪がある。この事実の説明は、この学問の歴史が完全に書かれたことはなかったことに見出されるし、しかも、書かれたもののうちで、わずか数章しか正当なものはない。それというのも、その編集を支配した観点が厳密に文献学的なものだったからだ。修辞学は、現代では文体論で理解されているものだった、との見解が流布した。ノヴァーリスは文体論ないし修辞学について、ハイリングは実践的修辞学すなわち文体論について、また、ウースターは文体概説、すなわち修辞学について語っていた。⁶⁾それにも拘らず、約百六十年後、ラテン・アメリカのある卓越した専門家が文体論を、ノヴァーリスやウースターのように修辞学そきりと解することはしないで、新しい修辞学 (nueva retórica) と解し、いずれにしろ新修辞学を特徴とするこの現代に、できるだけ伝統的にそれを定義している：「……修辞学はジャンル、文体および文彩 (……) を研究する。だが修辞学はたんに文学的表現の分析や文法なのではなく、作文論でもある」。⁷⁾ヨハンネス・シュミットが1936年に文体論に

ついて、芸術としての言語の学もしくは言語表現とその美的効果の諸可能性の学だとした有名な定義の場合に見られるように、この学問の概念を精密化しようとする場合ですら、文体論の領域は表現法 (elocutio) の中に含まれる修辞学上の諸問題のいくつかに還元されることがはっきり分かるのである。そこでの唯一の相違は、この問題においても旧修辞学の主要関心事になっていた説得的要素 (peithama) がもはや斟酌しんしよくされてはいないということだけである。この考察は他の西洋の専門家にも通用する。たとえば、このようにして、修辞学の“切断手術”が行なわれることを認めている新しい雄弁術教師たちにとっては、旧修辞学の再評価は文彩の理論としてしか可能ではないのである。

上掲の例が特異な場合なのではない。以下において、ある人びとにとっては、新修辞学が今日流行の、旧修辞学への新しいレットルに過ぎない——そこから、「修辞学が本当は何であったのかを知らなければ、新修辞学を理解することはできない」という、ラ・パリス式の結論が出てくる——ことを証明する他の諸例をもわれわれは引用することになろう。

問題の全体を掌握するために、われわれはまず、修辞学を定義するのではなくて、この学問が二千五百年以上も存続してきた間に、何百に及ぶ定義づけの試みがなされた事実から出発するとしよう。これらの定義は三つの型にグループ分けできる。それぞれの型は、もっと長い間流布した、しかも、この学問の歴史の三大段階のひとつを反映している、より意味深長な定式化に還元できる。もちろん、多様性を、実際にはありもしなかった厳密な単一性に帰することによって、この問題の歴史的観方が誤る余地は大いにありうる。だが当面の場合、その危険は極めて小さいし、読者は私の主張が誇張ではないことに容易に気づくであろう。

第一の定義に従えば、修辞学は“説得の創出者”(πειθοῦς δημιουργός)である。プラトンはこの定義をゴルギアスに帰属させているが、かかる定義はイソクラテスによるものとして、古代には大いに流布していた。もっとも、クインティリアヌスの時代からすでに、この帰属に関しては重大な疑惑が表

明されていた。概説の主だった著者たちや有名な理論家たちだけに留意してみても、プラトン、イソクラテス、アリストテレス、エウドルス、ヘルマゴラス、アリストン、アポロドルスやキケローは、修辞学ないし、いわゆる演説家の義務（*officium oratoris*）なる概念の中核が、活動の全領域においても、あるいはただ政治・裁判の領域のみにおいても、説得であるという事実を、多少の相違はあれ、指摘したのである。

クインティリアヌスや彼以後の余り重要でない他の著者たちは、観念の方に優位が与えられるべきだと力説した——「それゆえ、言葉への配慮は事柄への配慮であるということを私は要求する」——が、このことは当時の修辞学がかつてあったものではもはやなかったことを十分に示している。

第二の型の定義はキケロー後からスコラ学までの段階に特徴的なものであって、本来の意味でのコミュニケーションや、とりわけそれが実現される手段へと、関心が明らかに移動したことを示している。説得が定義の特徴として現れるのはまれだし、その対象がひんぱんに想起されることもない。もっとも重要な定式はクインティリアヌスが課したもので、彼によると、立派に言う術ないし学——換言すると、コミュニケーションが完全になるようにする、専門家向きの規則、より正確には、経験的ではない、科学的規則の全体——ということになる。立派に（*bene*）という語はコミュニケーションの結果にも、その美的な質にも関わっている。適切に言うとか正しく言うといった定式は、この時期の当初には数も多いのだが、徐々に美しくという意味での立派に言う〔術〕に取って代られて行き、修辞学はますます、優美に話す術——*ars pulchre loquendi*——となるのである。クインティリアヌスが挙げているガダラのテオドルスの有名な定義においては、義務的ではなくて、可能な目標として——*in quoque potest*——説得が考慮に入れられており、力点は美的観点から見て完全な演説に導く手段に置かれている。したがって、修辞学とは「説得するのに役立つ、きちんと装飾を施された表現、選別、発見の術……」⁸⁾なのだ。修辞学は説得の術、すなわち哲学的主調のかかわり合いを有する術ではもはやないか、あるとしてもごく僅かである。修辞行為

の概念の主調として、装飾を推進することにより、当時の理論家たちは哲学の圏域から本来の意味での文学的問題意識のそれへと、明らかに修辞学を移動させている。

ボエティウスや、とりわけ、三自由学科 (trivium) と 四自由学科 (quadrivium) との伝統的区分をさらに一層はっきりさせたカシオドルスの貢献は、修辞学史にとってもっとも大切なもののようにわれわれには思われる。前者の三つの“術”は“表現の術”となり、それらは後者の四つの術の助けを借りて実現された現実的知識を正確に表現することをわれわれに可能ならしめる。表現と知識との分離はわれわれの学問をたんなる文学的手びきの役目に還元させてしまうし、そしてこの土台に立てば、装飾の術としてのみ考えられた術が普及することになるであろう。

装飾の術という、第三の定義は中世やもっと後ですら、ごくひんぱんに見られるものである。七自由学科を列記し、それぞれの役割をできるだけ簡潔に説明している、有名な記憶術的詩句の中で、修辞学は「修〔辞学〕は言葉を彩る」(rhet verba colorat) と述べられているが、このことは、この学問がハイリングによって1837年に定義されることになるような、実践的文体論となったことを示している。⁹⁾

もちろん、この時代にも相違する意見がいくつかある。ブルネット・ラティエニはこう定義している——「修辞学とは、普通の事柄においても、私的な事柄においても、十分かつ完全に言うことをわれわれに教える学問であり、そしてそのあらゆる意図は、言われたことが、それを聞く人びとにとって信じられるように、言葉を言うことにある」。重要性のない他のいくつかの例外を打ちちゃっておき、『話術』(L'art de parler) という極めて示唆的な題名をもつ有名な概論の著者ラミー (ベルナル) 神父の1675年の場合を想起しよう。このオラトリオ会士は説得のために上手に言う術なる定義に対して、次の理由から抗議している。すなわち、何かをうまくしないように教えるような“術”は存在しないし、さらにまた、言語の唯一の機能は話し手の主張に相手の同意を得ることにある、というのである。これでは、伝統的定

義から *bene-bien* (よく, 上手に) を削除することだけでなく, 説得に関する無用の指示を削除することをも正当化することになる。同じころには, ブルダルとル・グラが, あまり名声を博しなかった概論の中で, 立派に言う (*bien dire*) と説得する (*persuader*) との相互依存について強調しており, 雄弁術の倫理的かかわり合いについて他の人びとがなしている以上に問題提起を行なっている。今世紀初頭には, 不当にも忘れられているイタリアの作家ジュゼッペ・ブレッツォリーニ (『説得する術』 *L'arte di persuadere*, 1906) が, 修辞学は私の考えをいかに飾り立てるか (*Come adornare il mio pensiero*. A. G. Bertolotti の手引書 (Bergamo, 1926) の表題による) を教える術より以上の何かであることを知っていた。歴史が忘恩で報いたもうひとりの先駆者カルロ・ミケルスターテル (『説得と修辞学』 *La persuasione e la retorica* (Firenze, 1922) の著者) についても同様である。だがこれらの意見がみな不一致なのは外見上だけなのだ。なぜかというところ, それらは旧修辞学の常套句を再び流布させているに過ぎず, この学問の運命を変えることに成功してはいないからである。

ラミー, ブルダルおよびル・グラの立場は言語機能の狭い理解だけとか, あるいは, 術としての術は過ちをまねきかねない——「術は高慢にさせる」 (*ars inflat*) ——と見なすキリスト教理論家たちの伝統的態度だけを反映しているのではない。それはさらに, 華美な雄弁術が依拠していた旧修辞学の議論の余地なき獲得物のひとつに関する驚くべき無理解をも示している。伝達行為は同時に術の問題でもありうるという事実が大事なのだ。なぜかといえば, 話し手は対話者から期待することを示そうと欲するだけではなくて, 自身のひきつけられ方——ロマーン・ヤコブソンやフランス新批評によって見事に今日再発見された事実——に対話者の注意を喚起することも欲するからだ。しかしながら, たとえ例をいろいろとふやしたとしても, この立場はそれでもなお孤立している。なぜなら, 歴史においては, 事実を証明する資料の量が, その特徴——換言すれば, 歴史的, つまり有意的事実——の源泉をなすわけではないからだ。ここでわれわれが言及している時代において

は、修辞学を裝飾術 (*ars ornandi*) と考えるのが、ただたんに量的意味においてだけでなく、質的意味においても優勢な観点なのである。そのことをもつとも雄弁に物語る例は、ドメロンの1805年の概論が示してくれる。彼はこの学問に対する一般的態度を完全に要約している。修辞学が裝飾の術 (テクネー)、一種の“グリセリンの術”——散文作品の中に裝飾を配分する術——となったのだ。この時期に初めて、R・P・デールの『名詞の下に配列したフランス語形容句』 (*Les épithètes françaises rangées sous leurs substantifs*) のような著作が可能となったのであって、著者はこの本を詩人および雄弁家に有用な著作として推薦している (Lyon, 1759)。われわれの知るところによれば、フランスの修辞学概論書を最近研究した専門家たちはこの本を引合いに出していないけれども、それは疑いもなく、修辞学史にとって最重要な事実のひとつなのだ。R・P・デールの著作はいわゆる裝飾法を最大限に助けることを意図している。実際、推薦された裝飾を見つけるためには、誰でもそれぞれの名詞に応じてその辞書を引くだけでよかったのである。

かくして、キケロー後の時代から始まった、修辞学の文学化の過程は中世において終局的に閉じてしまい、この時代には修辞学と文体論——当時の用語法では文法——との同義性が異口同音に受け入れられたのである。¹⁰⁾ 修辞学は哲学的学問としてその長い活躍を始めたのであったが、その歴史は大づかみに言って、文学的学問への変貌の歴史なのだ。われわれが目撃している新修辞学の急変は、学際的諸関係を掘下げるための新しい基盤を提供する哲学的学問として、その獲得物のいくつかを再発見し、創造的にその価値を増大させることを意味する。一般言語学や最近の文学批評——*new criticism* および *nouvelle critique*——においては、本来の意味での新修辞学は問題になり得ないだろう。なぜというに、この領域では連続性が存在するからだ。つまり、^あ文彩や^や転義、文学作品のジャンルとか構造についてはいつも語られてきたのである。

極めて目ざましい唯一の刷新は、実に、この学問を出発点とする言語学者

や文学批評家が、モリエールの有名な登場人物と同じように、自分たちが行なっているものは結局のところ修辞学であることを発見したという点にある。アメリカ系とフランス系で相違はあるにしろ、“新批評”はそのことを熱烈に認識しているが、しかし、新修辞学なる用語をささいなことのためだけに用いるのは、用語の濫用であり、真の刷新の途上において障害になるように思われる。また、新しい雄弁術教師たちが、西洋では、修辞学を“切断”し続け、しかもペレルマンとその一派の仕事や、説得術の領域でのアメリカの著しい貢献を知らずにいるのを見ると、われわれは驚かずにおれないのである。

以下の数章においては、キケローが正当にも軽蔑をもってへぼギリシャ人 (*graeculi*) と呼んでいた、技術者的な狭い視野の取るに足りぬ雄弁術教師たちが、修辞学の価値下落にいかにか寄与したかを見ることになる。実際には、この学問は学際的諸関係を厳密に組織化する最初の基礎を提供したのだった。だから、現代のへぼギリシャ人たちによって作製された文彩や転義の一覧表つき編纂物の再出現が象徴している危険に注意を喚起しなければ、間違いであろう。彼らにとっては、修辞学は有望な商売 (*business*) を提供するのにふさわしい、再流行しだした学問に過ぎないのだ。それが広く哲学的な学問から文学的学問へとどのようにしてまたなぜ変貌したのかを示しつつ、筆者としては現下の斯学復権が表わしている真の刷新の理解をより容易にし、かつまた、現実の刷新が一時代的な流行と化するのを妨ぎたいと思う。

原注

- 1) *Discours et conférences*, Paris, Calman Lévy Editeurs, 1953, p.137.
- 2) E. R. Curtius, *Die europäische Literatur und lateinisches Mittelalter*, Bern, Francke, 1954², pp.71-89 [邦訳『ヨーロッパ文学とラテン中世』, みすず書房, 1971, pp.86-111]; Louis Bréhier, *Le monde byzantin*, vol. III, Paris, Albin Michel, 1950, p.333.
- 3) H. I. Marrou, *Histoire de l'éducation dans l'antiquité*, Paris, Seuil, 1965⁷, pp.306-307. [邦訳『古代教育文化史』, 岩波書店, 1985]

- 4) Pierre Guiraud, *La Stylistique*, Paris, P. U. F., 1967⁵, pp. 29, 24
〔邦訳『文体論』, 白水社, 1963⁴, pp. 34, 28〕。
- 5) Cf. Vasile Florescu, *Reflecții fugare pe marginea unei enciclopedii filozofice*, in “Revista de filozofie”, București, 1969, tom. 16, nr. 3, pp. 388-391.
- 6) *Apud* Guiraud, *op. cit.*, p. 6〔邦訳, p. 8〕。
- 7) Cecilia Hernandez de Mendoza, *Introducción a la estilística*, Bogotá, Instituto Caro y Cuevo, 1962, pp. 61-63. 修辞学についてのこの同じ狭い理解はギローにおいても見出される——「文体論は、表現の科学にして個人的文体の批評であるという二重の形をもつ、現代の修辞学なのである」(*op. cit.*, p. 6〔邦訳, p. 8〕)。St. Munteanu の著書 *Stil și expresivitate poetică* を評する際、D. Macrea は修辞学と文体論との混同を保持しており、しかも彼は詩学からさえも修辞学をもはや区別していない——「詩学ないし修辞学——2千年以上も昔からの学問——……これ〔書評対象になった本〕は文体論という現代的名称のもとに、ルーマニア詩学の略史をも与えてくれる……」(“România literară”, nr. 32, 1972年8月3日)。
- 8) *Ars inventrix et iudicatrix et nuntiatrix decenti ornatu secundum mensionem eius, quod in quoque potest sumi persuasibile, ...* (*Inst. orat.*, II, xv, 21) ([修辞学とは] いかなる問題にも存在するであろうような説得のあらゆる要素の重要性に相応しい優美さをもって、発見し、判断し、表現する術のこと〔である〕)。修辞行為の基本要素としての説得への言及は、もっと後でさえ、カッシオドルス、セビーリャのインドルスのような編纂者たちにおいても表われている。
- 9) 原文では削除された部分を括弧つきで、二行の詩句を書き写しておく——*Gram(at)ica loquitur; dia(lectica) vera docet; rhet(or)ica verba colorat; mus(ica) canit; ar(rithmetica) numerat; ge(omet)rica ponderat; as(tron)omia colit astra*. つまり、「文法は話し、弁証術は真理を教え、修辞学は言葉を飾り、音楽は歌い、算術は数え、幾何学は測り、天文学は星を研究する」(詳細は、J. E. Sandys, *History of Classical Scholarship*, Cambridge, 1921, p. 149 et passim)。ある書写では、*rhet verba colorat* の代りに、*rhe verba ministrat* [修(辞学)は言葉を治める]とあり、修辞学が、当時詩人たちの解釈(enarratio poetarum)と考えられていた文法と混同されたことを示している。

- 10) 体系的学問として設立されて以来、文法は読み＝書きの技術（テクネー）であっただけでなく、広大な批評的関心や大演説家の解釈を証示する文学理論でもあった。そのことは、文法の父トラキアのディオニュシオスの定義や、クインティリアヌスのもっと有名な定義——「正しく話す術と、詩人たちの解釈と」（I, IV, 2）——からも明らかだ。カシオドルスにあっては、文法——今日なら“文体論”と言うであろう——と修辞学との相互浸透がはなはだ強大なため、分離は困難である——「実に文法とは、有名な詩人や作者から集められた、美しく話す熟練である。その任務は、誤りなく、散文的で韻律的な談話を組み立てることにある」（*Inst.* II, I, 1）」。

(1988. 12. 7 受理)